

グローバル金融危機以降のバングラデシュ縫製産業の現状と課題

——日系企業の進出動向に着目して——

長 田 華 子*

Bangladesh Ready Made Garment (RMG) Industries Current Conditions and the Challenges after the Global Financial Crisis

: Focus on the Japanese Corporation's Advancement

NAGATA Hanako

abstract

This paper explains the current conditions of the Bangladesh Ready Made Garment (RMG) industries and the challenges they faces after the global financial crisis. It focuses on the Japanese corporation's advancement to Bangladesh and investigates why they prefer Bangladesh RMG industry to other Asian countries. This is based on a field survey which I conducted in Dhaka, Bangladesh in June 2009. One of the most distinctive aspects after the financial crisis is that a changing position of China; from the largest mass production site to the largest consumer country. As a result many Japanese companies started to look for other periphery Asian countries as a new mass production site. This shift is mediated in the recent trend of Fast Fashion, ready to wear retailers. Bangladesh RMG industry has grown since 1980's as a typical case of the feminization of the labor force. Why has many global apparel corporations chosen Bangladesh as a new mass production site? My research found out that the main factor of the preference of corporations is not determined by cheap labor cost of Bangladeshi female workers but influenced by worker's, especially female worker's, high capacity of learning skills as well as highly motivated work force

Keywords : Bangladesh, RMG (Ready Made Garment) industry, global financial crisis, Fast Fashion, the feminization of the labor force

1. はじめに—不況の波を受けて活況を増すファストファッション

本論文の主題は、2008年10月に米国のサブプライムローン問題を発端に発生した、グローバル金融危機（以降、金融危機と省略）以降のバングラデシュ縫製産業の現状と課題について、特に日系企業の現地への進出動向に焦点を当てて分析することである。今回の金融危機の特徴の一つとして、この時期を境目にして、これまで世界最大の生産拠点の位置づけであった中国が、世界最大の消費市場への転換に伴い、新たな生産拠点として（中国よりも）より周辺のアジア諸地域への分散、移転という現象が生じている点が指摘できる。中でも、中国からの生産拠点のシフト化を非常に素早い対応で進めているのが、後述するファストファッションとも呼ばれる自社ラベ

キーワード：バングラデシュ、縫製産業、グローバル金融危機、ファストファッション、労働力の女性化

*平成20年度生 ジェンダー学際研究専攻

ル製品小売業 (SPA: Specialty Store Retailer of Private label Apparel の略語)¹群である。それらの企業にとって、新たな生産拠点としての有力候補地域がバングラデシュ人民共和国 (以降、バングラデシュと省略) である。なぜ、それらの企業は他の周辺アジア地域でなくバングラデシュ縫製産業を選好するのか。そこには労働コストが安いという点だけでなく、バングラデシュ人、とりわけ女性労働者の労働意欲の高さと技術習得の飲み込みの早さという点が浮かび上がる。本稿は、日系アパレル関連企業のバングラデシュ縫製産業に対する選好理由を、現地調査に基づく現状分析を主軸として詳しく論じたい。

なお、本稿における理論的貢献とは、現在のグローバリゼーションの特殊性を《生産領域のグローバル化》の最新局面という視角から実証することにある。といふのも、この現在起きている金融危機の最新局面を分析することとは、《生産領域のグローバル化》の最新局面を扱うことを意味するからである。1970年代以降の現代のグローバリゼーションに対するジェンダー分析の成果は、次の三つの局面を析出したことにある (足立, 2007: 63-67)。第一の局面は、古典的国際分業 (先進資本主義国=工業生産/途上国=第一次製品・原料・食料生産) のもとでの生存維持経済への商品経済の浸透過程と、そこにおける女性の社会経済的位置の変容に関するものである。第二局面は、古典的国際分業に代る新国際分業 (NIDL: New International Division of labor) の進展、すなわち資本蓄積の空間的・時間的前提条件の変化、その最も劇的な現象形態として労働力の女性化が世界的な規模で進化したことにある²。そして第三の局面は、第二局面における《生産領域のグローバル化》だけでなく、むしろ現在においてはケア (家事、介護、看護等) 労働を中心とする《再生産領域のグローバル化》にもその特徴を見出しうることである。この三局面は決して段階的に発生するのではなく、常に重層化して展開している点が重要であり、本稿の理論的な位置づけは、この第二局面、すなわち《生産領域のグローバル化》の最新局面にあるということである。

さて、この金融危機は瞬く間に実体経済に影響を及ぼした。100年に一度とも言われるほどの不況の波は世界中に広がった。日本でも不況による雇用悪化は深刻な現象となり、個人消費の落ち込みへと影響した。大物家電や自動車の買い控え、行楽地への出控えなど、人々の節約志向が相次ぎ、各企業の決算成績は前年度までと比べて大きく落ち込んだ。

そんな中、唯一とも言える営業利益過去最高益を記録した日本企業がある。株式会社ファーストリテイリング、ユニクロである³。2008年8月期の売上高は5864億円 (前期比11.7%増)、営業利益874億円 (同34.7%増)、経常利益は856億円 (同32.7%増) と大幅な増収増益を可能にした (ファーストリテイリングアニュアルレポート2008, 48)。スーパーや百貨店など国内小売業界の業績が落ち込む中、ひと際目立ったのがこのユニクロを始めとする自社ラベル製品小売業 (SPA) 群である。この業態を有する代表的な企業は、SPAモデルの創始者であるGAP (アメリカ) やH&M (スウェーデン)、FOREVER 21 (アメリカ)、ZARA (スペイン) 等がある。SPAの重要な特徴は、商品の企画から始まり消費者の手に届くまで自社が一括管理することといえる。その為、低価格を実現し、かつ小ロット多品種の開発に取り組むことで、品揃え豊かでファッション性に富んだ、最先端の流行をより素早く消費者に提供することが可能なのである。商品供給の早さに由来して、ファストフードならぬ「ファストファッション」とも呼ばれる。

本稿は、このファストファッションの商品提供者側である企業、特に日系企業に焦点を当てて論じる。これまで日系アパレル⁴企業の生産拠点の大半は中国であった。日本から中国への進出は1980年代後半からその兆しを見せ、1990年代以降には最大の生産拠点として確立する (織研新聞社, 2009: 88-89)。しかし、急速な経済成長を達成している中国は、現在労働コストの上昇に伴い、世界最大の生産拠点というよりもむしろ世界最大の消費市場として捉える見方が有力である。また、中国一國集中へのリスク分散 (チャイナ・プラスワン)⁵や中国製品の信頼性の揺らぎといった問題も絡み、多くの日系企業が生産の拠点を (中国よりも) より周辺のアジア諸国にシフトさせているのが現状のようである。ユニクロの事例を用いれば、現在、製品の9割を中国で委託生産しているが、段階的に委託生産拠点のシフト化をするという。実際、生産量の3割から4割程度を中国外に移すべく検討しているようである (川嶋, 2008)。現在、その代表格に挙がるのがバングラデシュであると考えられる。まずはその実態について次章で論じたい。

2. ファストファッションの生産拠点—中国からバングラデシュへの分散・移転傾向

各店舗で売られている商品のタグを見れば、すぐにどこでその商品を生産したのかが分かる。中国、韓国、ベトナム、カンボジア等と並び、「メイド・イン・バングラデシュ」と記載されたタグがついているものも、近年見かけるようになりつつある。ただ、財務省貿易統計によれば、2009年6月の衣類及び同附属品の輸入額のうち79.1%を占めるのは中国製であり（財務省貿易統計、2009）、日本の衣類製品の輸入においては、まだ中国依存の状況が見受けられる。

バングラデシュと言えば、アジアの中の最貧国としての位置づけはまだ根強い。1947年英領インドからパキスタンの一部として独立、そして1971年にはパキスタンからの独立と二度の独立を経て、現在のバングラデシュ人民共和国となる。しかしながら、建国後まもなく1973年から74年にかけてベンガル大飢饉が発生し、国政を巻き込むまでの大惨事となる。また、1988年には20世紀最大と言われる大洪水が、1991年には史上最大規模のサイクロンと相次ぐ自然災害がバングラデシュを襲った。現在に至っても自然災害は後を絶たず、2009年5月にもサイクロン「AILA」（アイラ）がバングラデシュを直撃したばかりである。各国・機関からの対バングラデシュ政府開発援助（ODA）額は多少の増減はあるものの増加し続けており、2008年度の総額は20億6150万ドルとなっている（Ministry of Finance, 2009）。だが、未だに1日1ドル以下で生活する人口は全人口の41.3%を占めており（UNDP, *Human Development Report 2008*）、貧困削減への道は険しい。

その一方で、バングラデシュの2008年度GDP成長率は6.21%を記録した（Ministry of Finance, 2009）。2004年度以降から継続して6%代の成長率を堅持しており、経済成長をゆるぎないものとしつつある。この背景には、主幹産業である縫製品輸出の安定的な伸長と海外労働者送金の伸びが指摘できる。2008年度の一人当たりGDPも2008年度は554米ドルと、前年度の487米ドルから大きく上昇した（同上）。これらのことから、ゴールドマンサックス社は、BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）に次ぐ新興経済国、「ネクスト11」⁶の一つとしてバングラデシュを位置づけた。

ではこのような状況を踏まえて、バングラデシュの直接投資はどのような状況にあるのだろうか。表1は1999年度から2008年度までのバングラデシュ直接投資額の推移を示している。輸出加工区を除く一般向け投資額は、1999年、2000年は30億ドル代を達成しているのに対し、2001年以降低下の兆しを見せ、2002年から2005年までは数億ドル単位まで低下、ほとんど変化がないままの状況が続いた。しかし、2006年度には一度30億ドル代にまで一気に回復するも、2008年度には2億100万ドルにまで再び低下する。

表1 バングラデシュ直接投資額推移

単位：百万ドル

年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
一般(a)	3,109	3,443	2,691	302	368	370	510	3,135	1,398	201
EPZ(b)	72	35	46	53	103	114	119	113	152	302

(出典) 在バングラデシュ大使館、2009、7頁。

(a)輸出加工区（EPZ）を除く直接投資（登録）。(b)輸出加工区（EPZ）向け直接投資（実行）。

その一方で、輸出加工区（EPZ）向けの直接投資額は輸出加工区を除く一般向けに比べてその額は少ないものの、1999年度から2008年度まで増加傾向にある。特に、2008年度は、最高額の3億200万ドルを記録しており、前年度までと比べて突如投資額が増加していることが分かる。バングラデシュ国内には現在8つのEPZがあるが⁷、その内のバングラデシュの首都であるダッカEPZと第二の都市と言われるチッタゴンEPZの二つで投資額の7割以上を占めるのが実状である。表2と表3はそのダッカ輸出加工区向けとチッタゴン輸出加工区向けの投資額と輸出額をそれぞれ示している。いずれの輸出加工区ともに1999年度から2007年度まで、投資額は多少の増減はあるものの増加し続けており、2007年度はともに最高額を記録している。特に、チッタゴン輸出加工区は、2007年度の投資額は1億2646万ドルと前年度の3262万ドルから大きく上昇した。輸出額も双方ともに2007年度は最高額となっている。ちなみに、バングラデシュからの輸出入はチッタゴン港から行っており、ダッカ輸出加工区へ投資する企業はダッカからチッタゴンへの約6時間かかる物流ルートを利用して、製品を運搬する。

表2 ダッカ輸出加工区（EPZ）向け投資額と輸出額推移

単位：百万ドル

年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
投資	19.80	24.05	32.01	59.14	49.36	51.35	61.57	87.64	110.34
輸出	346.72	447.51	466.76	554.79	667.60	757.73	918.30	1033.03	1146.50

(出典) Ministry of Finance, 2008, 109.

表3 チッタゴン輸出加工区（EPZ）向け投資額と輸出額推移

単位：百万ドル

年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
投資	15.18	24.30	22.37	42.14	55.43	45.31	35.95	32.62	126.46
輸出	526.01	620.35	680.70	641.28	679.01	772.39	873.03	971.54	1117.17

(出典) Ministry of Finance, 2008, 109.

輸出加工区向けに限って言えば、その品目は企業数、投資額とともに縫製品が極めて強いことが分かる。表4は輸出加工区向け品目別企業数と投資額を示しているが、縫製品を扱っている企業数は67社あり、投資額は4億340万ドルに上る。投資額に占めるその割合は28.1%となる。加えて、繊維、縫製付属品、ニット製品と統いており、アパレル、繊維関連が全体の投資額の7割以上を占める。一方、輸出加工区を除く一般向けの場合、天然ガス産業を含むサービス産業が全体のほぼ6割を占める。次いで、化学産業が23.7%、繊維が7.9%と、輸出加工区向けで見られたようにアパレル、繊維関連での投資は極めて少ない。注目すべきは、主要投資国についてである。表5が示すように、一般向けと輸出加工区向けとの間で投資国に大きな違いがみられる。縫製、繊維の割合が著しく高い輸出加工区向けの場合には、(バングラデシュからの国内投資を除いて、)韓国、中国、日本、マレーシア、台湾など、元来縫製や繊維部門が強く、従来までの主要な生産拠点であった国々が上位を占めているといえる。一方で、サービス産業や化学産業が中心の一般向けへの主要国は、米国、サウジアラビア、UAEとなっている。

表4 輸出加工区向け品目別企業数と投資額（実行ベース、2008年6月時点累積額）

製品名	企業数	投資額（百万ドル）	割合（%）
縫製品	67	403.4	28.1%
繊維	31	339.3	23.7%
縫製付属品	35	157.0	10.9%
ニット製品	28	141.4	9.9%
電子製品	15	54.7	3.8%
靴・皮革製品	13	49.6	3.5%
その他	94	289.1	20.2%

(出典) Ministry of Finance, 2008, 108.

ちなみに日本の投資額は、2008年6月時点での累積で一般向けに対する投資額は12億750万ドル、輸出加工区向けでは1億7130万ドルに上り、特に輸出加工区向けでは主要上位3位につけている（バングラデシュの国内投資を除く）。

次章は、バングラデシュの《労働力の女性化》の典型である縫製産業の実態について論じる。金融危機以降も高成長を遂げているバングラデシュ縫製産業であるが、そこには貯水池としての女性労働力が前提とされていたのである。

3. バングラデシュ縫製産業の強さ—貯水池としての女性労働力

バングラデシュ縫製産業が強い。金融危機の影響を全く感じさせない状況が、統計上から推察できる。表6は、

表5 一般向け及び輸出加工区向け主要投資国（2008年6月時点累積額） 単位（投資額）百万ドル

輸出加工区を除く一般				輸出加工区向け			
国名		投資額	割合 (%)	国名		投資額	割合 (%)
1	米国	4,107.2	20.5	1	韓国	355.2	31.4
2	サウジアラビア	2,722.9	13.6	2	バングラデシュ	271.2	23.9
3	UAE	2,319.6	11.6	3	中国	182.5	16.1
4	英国	2,180.7	10.9	4	日本	171.3	15.1
5	マレーシア	1,412.1	7.1	5	マレーシア	106.8	9.4
6	日本	1,207.5	6.0	6	台湾	79.2	7.0
7	香港	998.6	5.0	7	米国	51.5	4.5
8	シンガポール	805.2	4.0	8	英国	32.5	2.9
9	ノルウェー	794.1	4.0	9	カナダ	27.8	2.5
10	韓国	631.5	3.2	10	ドイツ	20.9	1.8
	その他	3,027.8	15.1		その他	0.0	0.0

（出典）在バングラデシュ大使館、2009、7頁

2008年/09年の品目別の輸出量及び価格と各々の前年度比の変化を示している。大半の品目が大幅なマイナスの変化を示す中、縫製品とニット製品は共に20%代のプラス成長を記録している。月別の縫製品とニット製品の輸出額の成長率（前年度比）を見ても、金融危機直後の2008年10月に一時的な低下を見せるも、その後は各月ともプラス成長を維持している（EPB提供資料、2009）。

なぜ、バングラデシュ縫製産業は強いのか。その最大の理由は、貯水池としての女性労働力にある。表7は、15歳以上の雇用者数（employed persons）を示しているが、女性の68.13%は農業部門に従事している。縫製業を含む製造業部門の女性の割合は11.51%と農業部門に比べるとその割合はまだ小さい。だが、この製造業部門の中でも特に表8が示すとおり、織物、縫製関連部門に従事する労働者割合を見れば、男性と比して女性労働者の割合も比較的多いことが分かる。特に、都市部においては、男性労働者数を女性労働者数が上回っており、その割合は61.8%となっている。表9のPratima and Anwara（2006: 25）の実態調査でも、その他の輸出産業及び非輸出産業と比べて縫製産業において全労働者に占める女性労働者の割合が圧倒的に大きいことが分かる。縫製産業の割合は66.2%となる。

雇用者が大量の女性労働力を必要とするのは、雇用者がそこにメリットを見出すからである。最大のメリットはやはり男性に比べて労賃が安い点だといえる。表10が示すとおり、いずれの部門においても女性賃金は男性賃金に比べて低い。特に職階の低いヘルパーレベルで男性賃金に占める女性賃金の割合はより低い傾向が見て取れる。全労働者の平均は、女性賃金は男性賃金の58.5%となっている。

加えて、女性ならではの特質として考えられる「従順さ」と手先の「器用さ」という点が挙げられる。大抵の工場の始業時刻は朝八時、終業時刻は夕方五時までであり、一日8時間労働制を採用している（昼食の1時間休憩を除く）。残業があればさらに2時間加算する。昼食の休憩を除いて休憩時間は存在しない。次から次へと自分の目の前に流れてくるパーツをとにかく縫い合わせる。そのスピードを止めることは出来ず、トイレに行く暇もほとんどない。このような長時間、重労働の仕事に対して不満や待遇改善を求める女性からの声はほとんど存在しない。（企業内）正規組合があっても女性労働者の加入者は少ない⁸。とにかく、「従順」に仕事をこなしているのだ。加えて、縫製品の極めて重要な部分がミシンで縫う、縫製の作業である。少しでも縫製の質が乱れれば製品全体の形が崩れて見える。この肝心な縫製の部門は女性の比率が極めて高い⁹。ミシン操作に関する技術訓練をほとんど施すことなく見事に縫い上げる「器用さ」が女性達には備わっている。

上記のように、このバングラデシュ縫製産業の成長の核には、これは、ひいてはバングラデシュの経済成長となるわけだが、この「安価」で「従順」で、かつ「器用」な女性労働力の膨大な貯水池が前提とされていたのである。それ故に、安くて品質の優れた生産品を大量かつスピーディーに生産することが可能となる。結果として、世界中の有名企業からの受注、資本がバングラデシュへと大量に流れ込んで来ているのである。

表6 2008年/09年輸出量（前年度比）

単位：100万米ドル

	2008年/09年 [7月-1月]		2007/08年 [7月-1月]		変化	
	量	価格	量	価格	%	
					量	価格
1. ジュート [原料]	18.51	80.33	22.02	94.70	-15.96	-15.17
2. ジュート製品	2.58	151.44	3.25	189.87	-20.65	-20.24
3. 紅茶	4.90	10.01	8.00	11.13	-38.75	-10.06
4. 冷凍食品	59.54	309.81	72.64	327.97	-18.03	-5.54
5. 皮	23.76	115.95	36.65	170.07	-35.17	-31.82
6. 縫製品	994.13	3389.99	826.84	2811.27	+20.23	+20.59
7. ニット製品	1719.52	3803.57	1370.27	3014.60	+25.49	+26.17
8. 化学製品	-	189.33	-	102.76	-	+84.24
9. 農産物	23.20	52.05	26.34	56.83	-11.92	-8.41
10. 電化製品	-	96.44	-	121.53	-	-20.65
11. その他	-	932.13	-	827.21	-	+12.68
合計	-	9131.05	-	7727.94	-	+18.16

(出典) Bangladesh Bank, 04/2009, p.16.

表7 15歳以上雇用者数（employed persons）

	合計		男性		女性	
	数(000)	%	数(000)	%	数(000)	%
合計	47357	100.0	36080	100.0	11278	100.0
農業	22767	48.07	15084	41.81	7683	68.13
非農業	24589	51.92	20996	58.19	3595	31.87
—製造業	5224	11.03	3926	10.88	1298	11.51
—その他の産業	1651	3.49	1538	4.26	114	1.01
—サービス	17714	37.04	15532	43.05	2183	19.35

(出典) BBS (2008, 43)

表8 織物、縫製関連部門に従事する労働者割合（%）

バングラデシュ			都市部			農村部		
全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性
100.0	54.8	45.2	100.0	38.2	61.8	100.0	63.4	36.6

(出典) BBS (2008, pp. 162-63)により作成。

表9 各産業別女性労働者割合（%）

	縫製産業	その他輸出産業	非輸出産業
全労働者に占める女性労働者の割合	66.2	14.7	6.7

(出典) Pratima and Anwara (2006: 25)

表10 縫製産業における男女別賃金格差（1997年）

職階	男性平均賃金	女性平均賃金	男性賃金に占める女性賃金の割合 (%)
裁断（マスター）	3935	—	—
裁断（ヘルパー）	1512	890	55.3
縫製（監督）	4234	3082	72.8
縫製（オペレーター）	2254	1536	68.1
縫製（ヘルパー）	1200	762	63.5
品質管理・検品	4038	1724	42.7
プレス	1894	1106	58.4
梱包	1528	1157	75.7
最終工程（ヘルパー）	1209	1023	84.6
全労働者	2258	1321	58.5

（出典）Pratima and Anwara (2006: 37)

4. バングラデシュ縫製産業の「魅力」—日系企業からの視点

それでは、バングラデシュへ受注、資本投下している企業からみたバングラデシュ縫製産業の「魅力」とは何であろうか。2008年以降から新たにバングラデシュへ進出を開始した二社の日系企業へのインタビューに基づいて論じてみたい。執筆者は、2009年6月から、金融危機以降の日系企業のバングラデシュへの進出動向を探るべく現地調査を行ってきた¹⁰。二社のいずれも縫製部門での受注及び直接投資を開始した企業である。

まず、「魅力」について述べる前に、二社の日系企業がバングラデシュ縫製産業をどのような位置づけとして考えているか指摘しておきたい。それは二社ともに共通して、中国に次ぐ第二の生産拠点の最有力候補としてバングラデシュを捉えている点は間違いない。その他のアジア諸国では代替不可能な諸要素があり、今後の可能性が大いにあるという。二社ともに今後はバングラデシュでの生産、受注をより伸ばすようである。どちらも安い労働コストという点のもとより、バングラデシュ人の労働意欲の高さと技術習得の飲み込みの早さという点に非常に重きを置いているように考えられる。すなわち今後の技術指導如何によっては、日系企業が最も重要とする低価格高品質の生産がバングラデシュという新たな新天地でも望めることになり、この点は重要と考えられる。

以下は、二社でのインタビューに基づき、バングラデシュ縫製産業の「魅力」を、執筆者が下記の5点としてまとめたものである。

《①豊富な労働力》まず、何と云ってもバングラデシュの人口の多さである。日本の0.4倍の国土面積に、約1.5億人の人口を抱えている。その内の15歳以上64歳以下の人口が6割近くを占める（BBS, 2008: 30）。重労働に耐えうる労働力が豊富にある点が第一の「魅力」として挙げられた。

《②安い労働コスト》第二は労働コストが安い点である。これまで日系企業が中心としてきた中国はもちろん、カンボジア、ベトナム、インドネシア等他の周辺アジア諸国においても近年労働コストが上昇しているのに対して、バングラデシュの労働コストは比べものにならないほど安い¹¹。

《③優秀な人材の宝庫》第三に、その安くて豊富な労働力を吸収するだけの産業が不足しているのが、バングラデシュの現状である。バングラデシュの主幹産業である縫製品は全輸出額の約7割以上を占める¹²。今後成長が望める唯一の産業がこの縫製産業だと言い換えられる。となると、おのずと優秀な人材がこの縫製産業に集まることになる。社員の水準であれば、MBAを取得した者や英語でのコミュニケーションが堪能な者も多いそうだ。たとえベンガル語を話せなくても、日本人が英語を通じて高度なビジネス交渉をすることは可能である。

《④労働意欲が高く技術習得の飲み込みが早い》第四は、バングラデシュ人の労働に対する意欲的で、前向きな姿勢である。工場へ行けばすぐに分かるが、皆黙々と作業に動いている。決して怠けたりはしない。また、上司に対して忠誠心が高く従順な点も特徴として挙げられた。加えて、技術や知識の提供をしても飲み込みが早く、吸収力がある点についての指摘もあった。そこに指導する甲斐を見出していると、インタビューした内の一社の担当者は話した。一度指導すれば、ほとんど間違いなく作業出来る。多くの労働者は全く技術指導をしなく

ても、数か月工場で補助的な作業をしていれば見様見真似でマシン操作までこなすことができるという¹³。加えて、特に女性労働者の手先の「器用さ」という点に関して言えば、バングラデシュで伝統的に作られてきた「カンタ」と呼ばれる刺し子の布との関連があるだろうと考えられる。バングラデシュとインドの西ベンガル州を含むベンガル地方で古くから作られているこのカンタの作り手は、階層、宗教、年齢を問わず女性である（五十嵐、2003）。母親から娘へとその技術は幼少期から伝承される。しかも良いカンタを作る母親の娘は理想的な嫁になるという強いジェンダー規範が働く¹⁴。工場で働く年頃には既に一通りの裁縫技術は身につけている為に、企業は常に高い技能を発揮する労働者を、極めて安い教育コストで補充することが可能となる¹⁵。

《⑤輸出加工区内外における外資系企業への優遇措置、一般特惠関税制度（GSP）》最後の五点目は投資環境と関税制度に関するものである。輸出加工区内外において一定期間の法人税免除や税制上及び金融上の優遇措置がある上に、バングラデシュは一般特惠関税制度（GSP: Generalized System of Preferences）¹⁶の適応国であり、輸入税率が通常より低い。

以上5点故の日系企業にとって大いなる「魅力」を秘めたバングラデシュ縫製産業なのである。

5. 山積した課題

しかしながら、バングラデシュ縫製産業には課題がないわけではない。むしろ、課題は山積みといっても過言ではない。第一に、現地で工場を運営するために重要な電力、通信の整備が遅れている点である。輸出加工区内では停電は少ないそうだが、バングラデシュ国内では停電は一日に何度も起こる。加えて、道路や港湾といったインフラ整備もまだ途上にある。第二に、賄賂や盗難という悪習の蔓延、事務処理の遅さや通関時の諸問題といった点である。インタビューした日系企業の内の一社は、この点に関して非常に苦勞している胸の内を話された。第三は、政府の海外からの投資誘致に関する対応の不徹底が挙げられる。政策に一貫性がなく、変更が繰り返されるために安定した投資をすることが非常に困難だとの声もインタビュー時に挙げた。既存の外国企業に対する心遣いが欠如している点も指摘されている。また、近年相次ぐ日本を含めた海外投資家がバングラデシュを訪れていることに対する満足感からか、政府関係者の傲慢な態度に不満を持つ声も相次いで聞いた。このような多くのリスクを抱えていることもこのバングラデシュの実態である。実際に、投資をすると公言しながらも上記のようなリスクがある故になかなか投資に踏み切れない日系企業は数多く存在している。

6. おわりに—バングラデシュ縫製産業の今後

本稿第2章においてバングラデシュ縫製産業は金融危機以降も輸出額を伸ばしており、その影響を全く感じさせないと指摘した。しかし、それは統計上からであり、執筆者の現地調査に基づけば確実にその影響が出つつあると見てよい¹⁷。小規模な下請け工場においては倒産、閉鎖しているところも少なくない。特にこれまでバングラデシュ縫製品の最大の消費国であった米国における個人消費の落ち込み故に、海外バイヤーは盛んに低コストを要求し、生産国であるバングラデシュにおける縫製工場ではほぼ利益率がゼロに近い形で操業している。限界まで達した場合が倒産という悲惨な結果を招いているのである。倒産ゆえの労働者解雇は労働者の生活に影響する。本稿のまとめとして、今後のバングラデシュ縫製産業の展開について考えてみたい。①バングラデシュ政府と縫製関連団体、②日系企業、③労働者という三つの利害関係者の視点から論じたい。

まずは、国内外からの投資誘致や縫製品の輸出先の多角化に関するものである。これまでバングラデシュ縫製品の主な輸出先は欧米であった。しかし、今回の金融危機のように米国からの受注が大きく減少していることはバングラデシュ縫製産業にとって大きな痛手となっている。第四章で論じた課題に対する現地政府や関連団体の取り組みが今後さらに重要になると考えられる。

第二に、第一の点を成し遂げるためにも、縫製品の品質の高さが鍵となるであろう。ユニクロを始めとする日系企業にとって商品の価格以上に品質の良さが重要な要素と考えられている。「安かろう、良かろう」でなければ、日本の消費者は購入しない。日系企業の現地化が試されるだろう。

最後に、労働集約産業の典型である縫製産業にとって、生産に従事する労働者、特に女性の「技術」は出来上

がりの製品の要となる。しかし、執筆者はこの労働者自身が、労働者として成熟しているかという点について非常に懸念している。その最大の要因は、労働者の大半が、部分工程のみ対応可能な「技術」の所有者だからである。その傾向は圧倒的に女性に当てはまる。労働過程のジェンダー分析が今後の課題となるだろう。

金融危機を境目として、バングラデシュ縫製産業への日系企業の受注、投資は増加傾向にある。日本の店頭に並ぶ製品の多くがバングラデシュ製となる日も決して遠くはないだろう。安さと商品提供の早さを特徴としたファストファッションだが、その製品は生産地バングラデシュの大量の女性労働者の手によって作られていることを最後に強調して本稿を終えたい。

[注]

- 1) SPAを「製造小売業」と邦訳する 경우가多いが、本稿は「自社ラベル製品小売業」と訳すこととする。
- 2) この点に関してはマリア・ミースによる理論的貢献が大きいの（Mies, 1986）。
- 3) ユニクロは、持ち株会社であるファーストリテイリングの下部事業組織の一つであるが、本稿では特に言及しない限り個別事業だけでなくグループとして言及する場合もユニクロで統一する。
- 4) アパレル（apparel）を「衣服」の意として使用する。その意味、範囲については鍛島（2006）に詳しい。
- 5) 中国投資のリスクを回避するために、中国だけに投資を集中させるのではなく、並行して他国への投資も一定程度行うことでリスクの分散を図る企業の動向を意味する。加藤（2007）は、チャイナ・プラスワンの対象国として、ベトナム、カンボジア、インドネシア、マレーシア、ミャンマー、ブルネイと並べてバングラデシュを取り上げている。
- 6) 11カ国とは、ベトナム、フィリピン、インドネシア、韓国、パキスタン、バングラデシュ、イラン、ナイジェリア、エジプト、トルコ、メキシコである。
- 7) 8つとはダッカ、チッタゴン、モングラ、コミラ、ウッタラ、イシュワルディ、アダムジ、カルナプリーである。
- 8) 執筆者の縫製女性労働者への聞き取りの中で、組合加入希望を申しでたところ、解雇宣告を受けた事例があった。Pratima and Anwara (2006: 78)も、縫製労働者が労働組合に加入したがない理由を、労働に関する権利に対する労働者の無関心や加入による解雇言い渡しの恐怖について指摘している。Dannecker (2000: 36-38)は（企業内）正規組合とは別に、非正規組合の事例として、1994年四名の女性労働者が立ち上げたBangladesh Independent Garment Workers Unionを取り上げている。
- 9) Pratima and Anwara (2006)の1997年調査によれば、縫製部門の全労働者に占める割合は、男性が31.7%に対して女性が68.3%である。他、各部門の女性の割合は管理部門で8.4%、裁断部門で23.9%と極めて低い。
- 10) 平成21年度科学研究費補助金により遂行。2009年6月3日～22日、7月2日～27日までダッカに滞在。
- 11) 現在、ダッカEPZ内における労働者レベルの基本給は2100Tkほどだという。2009年8月現在、1米ドル=69.06Tk（Bangladesh Bank）
- 12) Ministry of Finance (2009: 78)によれば、2007年/08年の全輸出額に占める縫製品の割合は36.69%、ニット品の割合は39.21%となる。
- 13) インタビュー企業の一社では正式な技術訓練はなく、初職の場合でも1年ほどでオペレーター職に従事可能。
- 14) バングラデシュ縫製産業の労働力の女性化とその背景にあるジェンダー規範については別稿に譲る。
- 15) 女性労働者の技術習得と幼少期からのジェンダー規範に基づく家庭内における役割、仕事との関連については、Elson and Pearson (1981)において指摘がある。
- 16) 先進国が開発途上国から輸入を行う際に通常の関税率よりも低く税率を設定し適用すること。開発途上国の経済発展と工業化の促進を目的とした国際的途上国支援制度のこと。
- 17) 日本貿易振興機構（JETRO）ダッカ事務所、バングラデシュ縫製関連団体であるBGMEA（Bangladesh Garment Manufacturers & Exporters Association）、BKMEA（Bangladesh Knitwear Manufacturers & Exporters Association）におけるインタビュー調査での回答に基づいている。

[参考文献]

- 足立真理子（2007）、「再生産領域のグローバル化と世帯組織保持（householding）」、F-GENS ジャーナルNo.7.
- 五十嵐理奈（2003）、「女性の技術が支えるNGOアトーカントとノクシ・カント」、89-93頁、大橋正明・村山真弓（編著）、『バングラデシュを知るための60章』、明石書店。
- 鍛島康子（2006）、『アパレル産業の成立—その要因と企業経営の分析』、東京図書出版会。
- 加藤修監修・主著（2007）、『チャイナ・プラスワン』、NNA。
- 川島幸太郎（2008）、『なぜユニクロだけが売れるのか』、ばる出版。
- 在バングラデシュ大使館（2009）、『バングラデシュ経済要覧』。

織研新聞社 (2009)、『繊維・ファッションビジネスの60年』、織研新聞社。

Bangladesh Bank (2009, April), *Economic Trend*.

Bangladesh Bureau of Statistics (2008), *Labour Force Survey 2005-06*.

Diane Elson and Ruth Pearson (1981), “‘Nimble Fingers Make Cheap Workers’: An Analysis of Women’s Employment in Third World Export Manufacturing”, *Feminist Review*.

Hafiz G. A. Siddiqi (2004). *The Readymade Garment Industry of Bangladesh*, The University Press Limited.

Mies, Maria (1986), *Patriarchy and Accumulation on a World Scale: Women in the International Division of Labour*, Zed Books.

Ministry of Finance (2009), *Bangladesh Economic Review 2008*.

Petra Dannecker (2000), “Collective action, organisation building, and leadership: women workers in the garment sector in Bangladesh”, *Gender and Development*.

Pratima Paul-Majumder and Anwara Begum (2006), *Engendering Garment Industry: The Bangladesh Context*, The University Press Limited.